

『博物館 DX と次世代考古学』

野口淳*・村野正景**編、赤間亮***・矢野桂司****ほか著、雄山閣、2024年

安宅 望†

I. はじめに

2022年4月に公布された改正博物館法は、博物館が果たすべき地域文化・観光への貢献、また学校教育や生涯教育に対する役割期待を明確に示している。特に博物館資料のデジタル・アーカイブ化を推進し、資料のオープン化を図ることが明文化された。行政から役割期待が示された以上、それをどのように実現していくか、現在は施設を運営する側にボールが投げられた状態である。しかし、本書にも引用されている日本博物館協会のデータでは、「目録情報」をインターネット公開している博物館は全体の12%、「収蔵品のオンライン公開」を実施していない館が72%もある。博物館DXの線路は敷かれたものの、それに乗ることのできる博物館はまだ少ない。そういった現状に風穴を開けようと企画されたのが本書である。

本書は2023年4月に設立された公立小松大学次世代考古学研究センターのセミナーシリーズ第1回「博物館DXと次世代考古学」（同年7月22日開催）が契機となって企画された。各章では、政策目標と役割期待を実現し、博物館として持続可能な地域貢献をしていくための考え方や実践事例、DX技術が豊富に紹介されている。「まえがき」でも自負しているように「日本で博物館DXを正面に扱うのは、本書が初」である。

II. 本書の構成

1. まえがき 本書の趣旨

編者村野正景による「まえがき」は、本書の企画意図・構成について簡潔に述べていて、読者の興味や関心を的確にナビゲートしてくれる。博物館DXについてある程度の目算を持っている、あるいは実際に取り組んでいる読者には、この「まえがき」の記述から直接自分の関心のあるページに進んでもよいだろう。これから博物館DXを学ぼうとする読者は、「まえがき」をよく咀嚼（そしやく）してから第1章から読むことを勧めたい。

* 公立小松大学次世代考古学研究センター 特任准教授

** 静岡大学大学院情報学領域 准教授

*** 立命館大学デザインアート学部 教授

**** 立命館大学文学部 教授

† 立命館大学アート・リサーチセンター 客員協力研究員
n_ataka33@heart.ocn.ne.jp

2. 第1章 「博物館 DX の理論と制度」

第1章は、博物館 DX の「理論と制度」について書かれる。本書のいわば座学の部分で、冒頭は DX がもたらす次世代の考古学の新局面について解説する。次にその DX が博物館への役割期待を実現するための必須のツールとなった所以について、またそれが国家戦略における文化政策の大きな流れのなかで起きていることを、その仕掛け人とも言える専門家2人から聞くという形になっている。

最初は次世代考古学研究センター長中村誠一による「次世代考古学とは何か」である。主催者である次世代考古学研究センターの設立の趣旨と活動について紹介したあとに、同センターが志向する次世代考古学について、3つの形を紹介し、それを応用して調査研究を協働している中米ホンジュラスのコパン遺跡、グアテマラのティカル遺跡での実践事例を上げて解説する。3D（3次元）や医系・理系の先端技術を駆使した次世代の考古学が行き着く形が、パブリックアーケオロジー（公共考古学）である。「活力ある地域社会を地域住民と共創していく、地域と世界の両方に根ざした考古学」であり、考古学も研究成果を社会還元、社会実装していくことを目指す。その実践例としてホンジュラスのコパン・デジタルミュージアムの展示計画の立案と実施について紹介する。

次は文化庁博物館支援調査官の中尾智行による「博物館 DX の課題と展望」である。2022年4月の改正博物館法の公布による博物館をめぐる制度的な環境変化について解説し、博物館の達成すべき目標を3点示している。

- ①博物館資料に係る情報の保存と体系化
- ②博物館における調査研究の成果を含めた資料の公共化
- ③多様な創造的活動への博物館資料の活用促進

これら3つの目標を達成するために DX は欠かせない手段となる。一方で、現場の博物館ではデジタル化が思うように進んでいない実態がある。しかし、公共化と価値共創という目的を意識して本書を読めば、ヒントは必ずあるという希望を持つことができる。一方、学校教育の現場では、DX化した博物館と連携できれば、来館せずに資料を活用する、ひとつのデジタル資料を多人数で共有する、というオンライン学習が可能になる。書評者が注目したのは、DX化の推進が博物館の「関係人口」を広げるという考え方である。来館者だけに頼らず、博物館の魅力を発信し潜在的な利用者を増やしていく取組みは、インターネット社会ならではのものであり、DX化を博物館の規模の大小を問わず進めるべき所以である。

最後は次世代考古学研究センター准教授の朝倉由希による「文化政策の転換と博物館の役割」である。博物館法改正（2022年）の背景として、2010年代に大きく国家戦略として文化政策が転換したその経緯を丁寧に解説している。読者は博物館も国家戦略の中で文化政策の一翼を担っていることが素直に理解できるだろう。筆者の博物館 DX を市民との共創で可能にするという考え方が、第2章以降の実践例にいくつか反映されていることは、博物館 DX がゆっくりとだが着実に浸透していることを感じさせる。

3. 第2章 「博物館 DX の実践と展開」

第2章からは博物館等での DX の実践例を紹介する。9名の専門家がそれぞれの立場で DX の取り組みを解説していく。最初は、本書の編者である野口淳・村野正景による実践的研究事例報告である。野口は現在の博物館が乗り越えるべき障害を「現物第一主義」「基礎資料の公開性の低さ」と指摘し、これらは博物館 DX によって技術的に解決できると考える。DX化の論点を4つ「記録、保管・収蔵、

公開、体験」に絞り、デジタル化がそれぞれの機能をどのように変革できるかを、実例を挙げて解説する。村野は先進的かつ多面的に DX 化に取り組んでいる京都文化博物館での実践例を紹介する。地域に根ざし、その振興を博物館がアシストするというスタンスを貫く同館の取組みは、「文化芸術の振興に加え、観光やまちづくり、福祉にも範疇を広げる」という文化芸術基本法の精神に基づくものであり、多くの博物館の参考事例になると考える。

続いて、地方の小規模博物館での取組みを飛騨市教育委員会の三好清超が紹介する。岐阜県飛騨市の飛騨みやがわ考古民俗館は、収蔵資料を見える化する博物館 DX と DX を進める組織「石棒クラブ」の活躍で関係人口を増やし、地域外からも評価される飛騨市民自慢の施設にまでなった。小さな取組みから始めて次第に関係人口を増やしていく過程が大いに参考になるはずだ。

自然史系博物館での DX 実践例は、大阪市立自然史博物館の佐久間大輔が紹介する。自然史系博物館の一番の特徴は、資料数の多さ・多様さである。展示されている資料は収蔵品のわずか数%に過ぎない。「公共の利用への開放」を目指すには、いかに多くの収蔵資料へアクセスできるかが鍵となる。その鍵となる DX 化の実例を、インベントリ（収蔵品目録）のデジタル化から、資料撮影と画像のデジタル公開、重要標本や大型骨格標本の 3D 撮影など、多面的に紹介する。デジタルデータを活用した様々な仕掛けは、自然史系博物館と DX との相性のよさを感じさせる。

続いて、立命館大学教授の赤間亮と矢野桂司による、立命館大学アート・リサーチセンター（ARC）での文化資源のデジタル化と公開手法についての紹介である。ARC のデータベースの特徴は、「クラウド型 DB」（ポータル DB）であることだ。これは日本最大のデジタル・アーカイブのプラットフォームであるジャパンサーチに先行したシステムで、他館のデータベースがオープンリソースとしてリンク可能な仕組みで公開されていれば、このポータル DB に取り込むことができ、独自のメタデータを付与することもできる。加えて ARC 独自の研究用ツールを他館の収蔵品にも適用できる。さらに DB を発展させて年表型に編集したり、人物情報を取り出して蓄積したりと、研究者の意思によって DB を成長させていくことができるシステムとなっている。

ARC のもうひとつの取組みは、京都の歴史的地理空間情報を網羅的に収集し、GIS（地理情報システム）上で重ね合わせる「バーチャル京都」の構築である。平安時代から現在までの地理情報を重ね合わせ、時代ごとのベースマップを作成し、それに絵図や写真などのデジタルアーカイブ、発掘調査報告や名所旧跡等の文化資源情報と関連付けて、京都の歴史的景観をバーチャルに体感できるシステムである。また、これを発展させて祇園祭の山鉦のデジタルアーカイブ化にも取り組んだ。山鉦のデジタル化から、お囃子、町会所や通り景観も含めて山鉦に係る街全体のデジタルアーカイブ化を行った。コロナ禍の 2021 年、それらのアーカイブを編集して Web 上で「祇園祭デジタル・ミュージアム」を公開した。このような試みは 3 次元 GIS や VR 技術に時間次元を加えた 4 次元都市モデルと言えるものであり、都市の個性に合わせた応用が可能である。

博物館のデジタルアーカイブをさらに効果的に運用するために、ジャパンサーチと連携させる手法について紹介するのは東京国立博物館の阿兄雄之である。ジャパンサーチは日本の様々な分野・地域のコンテンツのメタデータを検索・閲覧・活用できるプラットフォームである。多種多様な博物館のデジタルコンテンツを、ジャパンサーチというプラットフォームで相互に連携させる方法と、その機能を活用することによって得られる効果について具体的に紹介する。デジタルアーカイブが相互に連携している姿は、ひとつのエコシステム（生態系）であるという指摘は、博物館 DX の今後の方向性を示しているように思う。

文献資料のデジタルアーカイブ制作の実践例は、京都府京都文化博物館の西山剛が紹介する。北野天神社が収蔵する100巻（冊）の古文書『北野文叢』のデジタル化である。これまで一部の関係者しか全貌を知り得なかったが、令和9年（2027）の御神忌千百二十五年半万灯祭に向けて、全丁撮影の完全な形で公開できるよう作業が進んでおり、その具体的な進め方を解説する。デジタルアーカイブを公開することで史料の持つ価値を広く知らせることができ、関連の研究がさらに進むことが期待できる。

最後に、九州大学名誉教授の岡崎敦がこれから求められる資料・情報管理専門職像について考察する。まずDX化が進む現在の情報管理社会を分析して、専門職として特に意識すべきあり方について述べる。岡崎はそれを人権保護や法令遵守、さらに情報の信頼性、「質」の保証であるという。その管理する情報の質を担保するのが情報管理専門職の責務となってくる。そのためにはルールの事前決定と厳正な運用管理、そして手続きやフォーマットの標準化などが必要になる。上位管理者であれば、大所からのコントロールが、下位であればその厳正な遂行が求められる。そのような人材を養成するには資格教育に加えて、現場での継続的な訓練が重要である。進化のスピードが速く、すぐに陳腐化してしまうノウハウ・技術を常にアップデートしていくことができる人材が求められる。けだし、その通りなのだが求めるレベルがいかに高すぎるように感じた。

4. 第3章 「最新のDX技術」

この章では、DX化に取り組む博物館を支援する技術を簡潔に紹介する。博物館と技術の出会い、技術的要望と共に思想・思考のマッチングが鍵となる。その技術を博物館等に提供している12の会社・法人がその技術と成果に加え、協働している館や活用事例を具体的に紹介する。二次元コードも併載しており、その法人のURLに飛び、さらに詳しい内容を知ることができる。

技術的に見ると3Dを活用した事例が多い。博物館資料や考古学との相性の良さによるのだろう。AIや3Dを使った技術は日進月歩で進化しているので、適当な時期にこの章の更新が必要になる。しかし、現場での取組みはそうフットワークよく進むとも思えないので、多少陳腐化した技術であってもあくまで博物館ファーストに考え、コンセプトと目的に適った技術を紹介するスタンスを保つことが重要だと考える。

5. 第4章 ディスカッション「博物館DXのいまとこれから」

最後の章は、セミナー「博物館DXと次世代考古学」におけるディスカッションの書き起こしである。モデレーターは国立民族学博物館名誉教授の関雄二、パネラーは第1章で登場した中村、中尾、朝倉、本書の編者である野口、村野である。

このディスカッションは、モデレーターが提起した博物館DX化に対する懸念や課題・期待についてパネラーがそれぞれの立場で意見を出し合うという形で進む。全員で「正しい答え」に収斂^{しゅうれん}させていくというより「多様な考え方」を示している。「まえがき」で述べられていたように、ディスカッションを読んで問題点を把握してから読むのもひとつの読み方だと書評者も考える。

III. まとめ

本書は、現場のもどかしさを理解しつつも、必ずブレイクスルーする道はあると教えてくれる。博物館の現場で働く人々には、壁を壊す前に一歩引いて、どんな手法が最適か作戦を練るための参考書

になるだろう。学芸員を目指す学生は、社会における博物館の現在地を知るために本書を利用できる。本書は、街のかけがえのない財産である博物館を、地域発展の拠点として持続可能な施設にするための現在の英知がこもった一冊である。